

# CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.99 July, 2008



## 目次

|  |  |
|--|--|
| <b>特集：CAPS 特別研究員によるレポート</b><br>..... 1   | <b>2008 年度所員、特別研究員の紹介</b><br>..... 8-9   |
| <b>ネパール選挙監視国際平和協力隊に参加して</b><br>特別研究員 山上 亜紀..... 2-3                                | <b>客員研究員 募集のお知らせ</b><br>..... 9  |
| <b>ロサンゼルス出張報告：第4回日米合同数理社会学会議</b><br>特別研究員 相澤 真一..... 4-5                           | <b>センター叢書新刊書『地域主義の制度論的研究』</b><br>廣部和也編..... 10                                     |
| <b>日本へのまなざし Oliver Verdenz さん</b><br>Bonn 大学からの協定留学生へのインタビュー<br>特別研究員 重野 純子..... 6 | <b>CAPS 研究プロジェクト募集のお知らせ</b><br>..... 10  |
| <b>学術研究員メンターによる講演 報告</b><br>講師：東京大学大学院総合文化研究科教授<br>遠藤 泰生 氏                         | <b>本を読む</b><br>『司法への市民参加の可能性：日本の陪審制度・<br>裁判員制度の実証的研究』藤田 政博 著<br>法学部准教授 飯田高..... 11 |
| <b>テーマ：反米：その歴史を考える</b><br>報告者：学術研究員 菅原 大一太... 7                                    | <b>研究活動報告他 2008.4.01 ~ 6.15</b><br>CAPS 事務局..... 12                                |

## 特集

## アジア太平洋研究センター特別研究員によるレポート

### ロサンゼルス出張報告

P.4 ~ P.5 相澤真一氏による報告  
第4回日米合同数理社会学会議で訪れたアメリカ西海岸で思ったこと。



会場風景（ロサンゼルス、レドンドビーチのホテル）

### ネパール選挙監視国際平和協力隊に参加して

P.2 ~ P.3 山上亜紀氏による報告  
日本から派遣された24名の選挙監視団の一員として、ネパール制憲議会選挙を支援。現地の状況に関する詳細な記事。

### Oliver Verdenz さん（Bonn 大学からの留学生）

P.6 重野純子氏によるインタビュー  
柔道を手始めに、アニメ、ジャパニーズロックに熱中し、現在は世界中に日本の音楽情報を発信するインターネットサイト J a M E (<http://www.jmusic.europa.com/>) の記者として活躍中。

## ネパール選挙監視国際平和協力隊に参加して

特別研究員 山上 亜紀

2008年5月28日、240年続いたネパールのシャハ王朝が終焉を迎えた。その翌日、ネパールの友人から届いたメールには、「ネパールが共和制になり、これからどうなるかわかりませんが、平和で豊かな国となることを祈っています」ということばが添えられていた。期待とも不安とも取れないこのことばが、ネパールの人々の率直な気持ちなのだろう。

ネパールが王制から連邦民主共和制 (Federal Democratic Republic) へ移行した背景には、2006年4月に勃発した第二の民主化運動がある (1990年の民主化運動と区別するために、ここでは「第二」とした)。全権を掌握していた国王に反旗を翻したこの運動は成功裡に終わり、その後、新しい憲法を制定するための制憲議会選挙が予定されたが、政党間の意見の食い違いにより2度の延期を余儀なくされた (2007年10月まで政治の流れや、選挙延期に至る経緯などは、CAPS ホームページ [www.seikei.ac.jp/university/caps/index.html](http://www.seikei.ac.jp/university/caps/index.html) のNo.97をご参照ください)。3度目に予定された2008年4月10日の選挙もまた、直前まで実施を疑問視されていた。政党間の軋轢だけではすまされず、ネパール南部のタライ地方に住む、マデシと呼ばれるインド系の人々と政府との間にも、不和が広がっていたからである。タライのマデシ問題は、政府とマデシ勢力との間の歩み寄りによって最悪の事態を免れ、4月の選挙はかろうじて実施されたが、選挙結果は大方の予想を覆すものだった。

ネパールの歴史的な転換期となったこの4月の

選挙に、幸運にも私は選挙監視団の一員として関わることができた。団長を含め、総勢24名で構成された「ネパール選挙監視国際平和協力隊」の活動は、ネパール全国の5ヶ所で展開された。

選挙監視団の本隊は、投票日の5日前にネパール入りした。カトマンズで一泊し、翌日には個々の担当地域に飛ぶ。私が担当した地域の拠点は、ネパール南東のピラトナガルと呼ばれる都市である。

ピラトナガル支部は、支部長と2つのチームで組織され、各チームが2人で構成される。それぞれが、ピラトナガル近隣の郡を担当することになり、私が加わったチームの担当地域はスンサリ郡となった。担当地域に到着してから選挙までには、3日間の猶予がある。その間にすべきことの第一は、選挙当日の監視ルートの選定作業である。そのために、担当地域の投票所をできる限り網羅していく。同時に、選挙管理事務所や警察署を訪問して、投票所の準備状況や治安状況を把握することが目的とされた。拠点としたピラトナガル周辺では日本を発つ前から爆弾騒ぎがあり、選挙前の3日間も、毎日どこかしらで爆弾騒ぎがある状況だった。スンサリ郡の、ある警察署を訪問したときのことである。警官にスンサリ郡内の危険地帯を尋ねると、北も南も西も、危険なので行かないほうが良いと言う。紛争が起こりやすい場所ほど監視の目が必要なのではないか、という思いと、警官の「危険な地域はわれわれが行くので、あなたたちは比較的安全な地域を回ってください」という助言との間には大きな隔たりがあり、活動の難しさを感じさせられた。

投票所の職員は、概して私たちを暖かく迎え入れてくれたが、危険を察知して投票日当日には来ないほうが良い、と忠告してくれた住民もいた。スンサリ郡のインド国境に程近いある村では、投票日の2日前に共産党毛沢東主義派 (マオイスト、以下毛派と記す) とマデシの衝突があり、村の治安も良くはなかった。投票日の前日にその村の投票所を訪れると、ある男性が「今日は平穏だけど、明日は何が起こるかわかりません。だから、明日は来ないほうが良いですよ」と声をかけてきた。実際、投票日前日と当日の2日間はマデシによるストライキがあり、インドの国境へ近づけば近づくほ



ネパール全図

(Shrestha 1998 Nepal in Maps, Kathmandu: Educational Enterprise Pvt. Ltd. を基に筆者作成。で囲んだ地域は、監視団全体の監視地域。矢印は筆者の担当地域)

ど危険と聞いていた。ネパール人の助手と運転手は、選挙当日もできるだけ南には下らないほうが良いという。万全を期すために、スンサリ郡の中心街と西の一部を中心に、当日の監視ルートを作成することにした。

投票は、4月10日の7時から17時までである。当日は開所状況を確認するために、6時にはホテルを出て、近隣の投票所へ向かった。6時過ぎに投票所に到着すると、すでに投票所のゲート前には長蛇の列ができていた。4月から5月は最も暑さの厳しい時期であり、昼間の外出は困難となる。そのせいもあってか、早朝のうちに投票を済ませてしまおうという人が多いようだった。開所準備が整い、ゲートが開くと、一斉に人がなだれ込んでくる。開所の直後は多少の混乱も見られたが、概して大きな問題もなく、普段は黙って待つことのできないネパールの人たちが、その日だけは文句も言わずに列を成しているのがとても印象的だった。



投票所で投票用紙を受け取る人々

スンサリ郡の中心街の投票所を回り、大半が何事もなく平穏無事に実施されているのを見て安心したのもつかの間、郡西部の投票所は、かなり勝手が違っていった。選挙前から危険と言われていたスンサリ郡西部の大半が、投票の前日からストライキを強行しているマデシの人々の居住地だからである。あるスンサリ郡西部の村の投票所は、投票所のゲートの手前から騒然としており、なにやら、もめごとが起きているようだった。車で近づくのは危険と判断し、手前で車を降り、投票所へ向かうと、投票所の中で有権者同士が言い争いをしていた。論争の具体的な原因はわからなかったが、その投票所は敷地も狭く、投票所職員の対応も行き届いていないようで、混乱の中でかろうじて投票している様子だった。

正午を過ぎると投票所を訪れる人も少なくなり、

14時以降に回った投票所は、いずれも閑散としていた。閉所時間である17時には投票所の職員しかいなかったため、閉所作業も滞りなく終了したが、投票箱の回収車が一向に来ない。18時になってようやく回収車が来たが、私たちが閉所状況を確認したのは都市部であるため、郊外の村ではいつ回収作業が行われたのかと、懸念が残った。

案の定、投票日の翌朝に開票場所へ向かう途中で、投票箱の回収車と何度かすれ違った。回収作業の遅延に呼応して、11時頃から選挙区ごとに実施される予定の開票作業は昼を過ぎても行われず、早い選挙区でも15時頃から、遅い選挙区では夜の20時頃からようやく開票作業が開始する始末だった。選挙区ごとにあてがわれた部屋に開票職員が円になって座り、開票していくのだが、カウントをするのは一人のみで、複数の人が同時に数えるわけではない。誰が数を偽るかわからないために、開票場所に集まった職員全員で一つ一つのカウントを確認するのである。「エク、ドウイ、ティン(1、2、3)...」最初は威勢の良かったカウントの声も、一晩過ぎると疲れが見えてくる。2日目の朝に開票作業を確認しに行くと、徹夜で開票作業を行っている職員は、疲れ果てた顔で開票作業を続けていた。



開票作業

結局、すべての開票作業が終了したのは2週間後だった。大方の予想に反して毛派が圧勝し、この結果に対して、「毛派の党員が脅しをかけて毛派に投票させたのではないか」という報道もあったが、国民の変革への思いが選挙結果に表れたとの見方もある。

6月11日には前国王が王宮を後にし、ネパール情勢は、また新たな局面を迎えた。前途多難であることは間違いない。ただ、ネパールというアジアの小さな国が、平和で豊かな国となることを祈るばかりである。



## ロサンゼルス出張報告 第4回日米合同数理社会学会議

特別研究員 相澤 真一

5月29日から6月1日にアメリカロサンゼルス近郊のレドンドビーチ市で行われた第4回日米合同数理社会学会議に参加してまいりました。この会議は、日本の数理社会学会とアメリカ社会学会の数理社会学セクションが、数年に一回、合同会議を行い、双方が研究発表を行うものです。成蹊大学からは、プロジェクト代表で文学部現代社会学科の小林盾先生と相澤が参加し、発表を行ってまいりました。小林先生は、この会議のオーガナイザーを務めており、会議中だけでなく、前後の諸事にも奔走しておりました。

会議の行われたレドンドビーチ市は、ロサンゼルス空港からダウンタウンとは反対側に車で20分ほど行った海岸沿いの街です。青い空と海が広がっており、とても気持ち良かったです。海岸沿いのホテル(写真)で、休憩時には気軽に海岸を



写真

散策することもできました。

私は、Occupational Aspiration in Japan: Reexamination of Status Attainment Model という表題の発表を行いました。JGSS(日本版総合的社会調査)という全国規模の社会調査の結果を用いて、15歳時になりたかった職業の世代ごとの変遷、要因と影響の変化について発表いたしました。初めての英語での学会発表でしたが、英語の堪能な小林先生の前でリハーサルをさせていただいた上で臨めたので、順調にプレゼンテーションを行うことができました。

特に、発表としてよかったと思われる点は2点あります。まず、一箇所、データから見つかった小話を入れたのですが、ここでアメリカ人がどっと笑ってくれたことです。もう一つは、質疑応答時にアメリカ側からコメントを寄せてもらったことです。総じて、十分発表内容が伝わったことが伺え、その点は大きな収穫となりました。もちろん課題もあり、英語の場合、とっさにつなぐ言葉が出てこなかったり、表現に正確さを失ったりした箇所もあり、もっと慣れていきたいと感じました。

小林先生は、Education or Networks?: Effects on First Job and Job Changeという表題の発表を行いました。私も参加している2005年社会階層と社会移動研究会の全国調査データを用いて、教育による人的資本と人間関係による社会的ネットワークの両者が人々の職業達成に与える影響を分析した報告を行ったものです。英語での発表も「10年選手」の小林先生は、手馴れた発表で、アメリカ側から出てきた質問にも的確に答えており、日米両国から絶賛を受けていました。

今回はアメリカ側、日本側から合わせて60名ほどの参加者がおりましたが、私にとってうれしかったことは、長らくご無沙汰していた出身大学である慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの複数の研究グループが来ていたことです。この研究グループでは、学部生や修士課程の大学院生も発表しており、日米両国から高い評価を受けていました。彼らを見ていて、学生であっても研究のフロンティアに携わる者には決して子ども扱いしない文化が出身大学のよき雰囲気だったことを改めて思い出しました。成蹊大学内で私が接している文学部現代社会学科の学生の皆さんも1年次からゼミを受けるなどして、とてもよくトレーニングされている印象を受けるので、もっと伸ばしていく上での示唆をいろいろと頂いてまいりました。

研究発表以外のことについてもご報告いたします。31日の夕方から夜は自由時間だったため、私は一人でダウンタウンに出てまいりました。最寄り駅までタクシーに乗り、そこからダウンタウンまではメトロレール(電車)に乗りました。

メトロレールは、日本でいうところの路面電車と地下鉄を合わせたような雰囲気でしたが、郊外と中心部を結ぶべく、かなり速いスピードで走っていました。また、3両か4両程度で短い編成なのですが、結構混んでいました。メトロレールに乗っている人々は、黒人やヒスパニック系のエスニックマイノリティの家族連れが多く、ネクタイを締め、ブレザーを着ていたアジア人である私は相当浮いている感じでした。また、全体的に決して恵まれているとは思えない地域を路線として結んでいる感じで、かなり荒れた街の風景を眺めながら、ダウンタウンに向かいました。

なお、車窓の風景で意外だったのが、ロサンゼルスではサッカーをしている人々が結構居たことです。アメリカというと、外でやっているのは、野球かフットボールがほとんどだと思っていたので、サッカーをしている光景はかなり意外でした。ロサンゼルスには、イングランド代表のベッカムも在籍するサッカーチーム(ロサンゼルス・ギャラクシー)もあるので、サッカーもポピュラーなスポーツになってきたのかもしれません。



写真

ロサンゼルス市中心部であるダウンタウンはかなり高いビルが立ち並んでいました。紹介した写真はその一画ですが(写真 )、左側のアパートはかなりくすんだ感じで建っていて、右側のビジネス向けのビルとはとても対照的でした。

さて、ダウンタウンに来た最大の理由は、ロサンゼルスフィルハーモニー管弦楽団(以下、LAフィル)を聴くことでした。クラシック音楽が大好きな私は、できる限り、「ご当地クラシック」を聴く機

会を大切にしています。今回も、幸いにも演奏会が開催されており、思い切って予約を取りました。

LAフィルのホームグラウンドは、2003年にできたウォルトディズニーコンサートホールです。その名の通り、ウォルトディズニー財団はLAフィルの最大の寄付者となっています。ホールに入ると、一転華やいだ雰囲気、ドレスアップしていた人々がかなり多く、ヨーロッパのコンサート会場にも似た雰囲気でした。また定期会員の方が非常に多い様子で、私の両隣の人たちも親しそうに声をかけあっていました。彼らの身なり、立ち居振る舞いとその数十分前まで見てきた電車の中の光景、車窓とのあまりのギャップに、アメリカの「格差社会」ぶりを改めて実感いたしました。プログラムや演奏の内容を語り出すと多くの方がついていけない話題になりますので、割愛いたしますが、とてもすばらしいものだったことはご報告いたします。

最終日は午前中の最後のセッションが終わった後、午後、日米両国の参加者でエクスカージョンとして、ロサンゼルス市内観光をしました。ハリウッドにも行きましたが、折しもその日にハリウッドで火災事故が起きた直後で通りが閉鎖されているなどして、物々しい雰囲気だったのが、少し残念でした。また最終日の夜にはビーチ沿いのレストランでカリフォルニアのシーフードを頂きました。蟹や海老、帆立などがアメリカらしく塩やマヨネーズで味付けされていました。アメリカ料理というと、決して評判は良くないですが、素材の味を生かしており、アメリカのシーフードも結構おいしいものだなと感じました。

大学院生時代の4年前、アメリカ中部、東部のいくつかの都市に行ったことがありましたが、その時よりもアメリカでの人々の社会的格差をはっきり見ることができました。これが都市の違いによるものか、経年での変化によるものか、自分の社会的問題意識の深まりによるものかはわかりませんが、経済発展した社会の不平等の問題として、プロジェクトを進める上で、今後も検討していきたいと思います。また、今回、初めて英語で発表を行った経験を生かして、今後、海外にも向けた積極的な発信を行い、積極的にアジア太平洋研究センターでの研究成果をアピールしていきたいと思

## 日本へのまなざし Bonn大学からの協定留学生へのインタビュー

特別研究員 重野 純子

ドイツでも日本製のアニメ、漫画、または村上春樹といった作家の小説が当たり前のように、いや、本当に当たり前の存在として受け入れられ、消費されている。今回はドイツからの留学生、Oliver Verdenzさんに日本文化との出会いとその影響について語ってもらった。

Oliver Verdenzさんは、ケルン出身。ボン大学でアジア地域研究を専攻し、去年8月から1年間の予定で成蹊大学に留学している。

彼は6,7才のときから柔道を習い始め、10代から日本の漫画(「ドラゴンボール」,「ドクタースランプ」)やアニメーション(「キャプテン翼」,「アタックナンバーワン」,「シティーハンター」など)に毎日のように接しながら成長してきたという。日本の漫画や雑誌を紹介する雑誌でロックバンドのXやLuna Seaなどの存在を知り、ボン大学を卒業した後は、日本で音楽プロモーションに関わる仕事につきたいと語ってくれた。Oliverさんは現在すでに日本の音楽についての情報を発信するインターネットサイトJaME (<http://www.jmusic.europa.com/>)の記者として活躍しており、先日東京ドームで行われたX-Japanの再結成ライブの取材にも赴いている。

幼いころから、柔道や漫画などに触れながら成長してきたOliverさんだが、当時はこれらが日本のものであるとは意識していなかったようだ。1995年からドイツでも放映が始まったアニメ「美少女戦士セーラームーン」は、その2年後にドイツでも爆発的な人気を博したが、この頃思春期を迎えようとしていたOliverさんは、このとき初めて多くのアニメーション作品が日本で制作されたものであることを知ったという。彼が日本のアニメや漫画、そして音楽に意識的に取り組むようになったのはこれ以降のことで、それまではただ面白いからと見てきたとのことだった。

日本のアニメは70年代からヨーロッパにも輸出されており、日本にまったく興味のないヨーロッパ人にも日本のアニメは当たり前の存在として記憶されている。しかしながら、一般的なドイツ人の持つ日本のイメージはいまだに「ゲイシャ、サクラ、自殺、高い技術力」といった旧来

のものであるというのがOliverさんの意見であった。日本のアニメーションが外国の視聴者に与える影響について考察することは本稿ではできないが、ここでは日本のアニメが世界の子供たちに日本の風習や風景といった「異なる世界」を提

示し、さらにOliverさんのような一部の若者が日本に興味を持ち、音楽産業などの日本の産業に携わろうとする一因となっていることを確認しておきたい。

Oliverさんによれば、Dir en greyやLuna Seaなどの日本のロックバンドはヨーロッパでも非常に高い人気を保っており、彼個人は歌手の鬼塚ちひろや土屋アンナが特に好きだとのこと。日本のロックまたはポップスのメロディーは親しみやすく、歌詞やその他の技術面においても完成度はかなり高いとの評価だった。また、ヒップホップも日本で人気だが、社会批判を通り越して犯罪歴が高いほどラッパーとしてのステータスが高まるようなアメリカやドイツの「ギャングスターラップ」の現在の傾向にOliverさんは批判的で、この傾向があまり見られない日本のヒップホップに好意的であった。これは音楽が若者に与える影響を考慮してのものである。

帰国の時が迫るOliverさんだが、ドイツには帰りたくないという。成蹊大学でのキャンパスライフ、吉祥寺での日常生活にも非常に満足している。食事に関しては日本の牛肉の美味しさは格別で、ドイツにいた時よりも肉の消費量が増えたとのことだった。ただしビールに関してはやはりドイツ製に軍配をあげていた。最後にカラオケの十八番をたずねたところ、ポップスやアニメの主題歌に並んでイルカの「なごり雪」を挙げ、「ただ、もうすぐ夏だからしばらくこの曲は歌えないね」と微笑むOliverさんだった。



Oliver Verdenz さん



## 学術研究員メンターによる講演 報告

## 「反米：その歴史を考える」

東京大学大学院総合文化研究科教授 遠藤 泰生 氏

学術研究員 菅原 大一太

2008年3月18日(火)にアジア太平洋研究センターの学術研究員制度のもと、東京大学大学院総合文化研究科の遠藤泰生先生をお招きして、「メンターによる研究会」が開催されました。私の専門はアメリカ文学ですので、普段は個々のテキストからアメリカに行き着いていっているわけですが、今回はアメリカ自体の研究、いわばアメリカそのものの側から「アメリカ」について考える機会をいただきました。開催されたセミナーは、「反米：その歴史を考える」というテーマのもとに行われました。私自身、アメリカのアメリカたる所以、つまりその「アメリカネス」が、アメリカ自身にとってどのように揺らぎ、問題となっているかについて考察することは多いのですが、今回のセミナーでは、アメリカ以外の地でのアメリカのとらえられ方、つまり「外部としてのアメリカ」がどのように機能しているのかを考えることとなり、研究の視点の幅を広げるための貴重な機会となりました。

会に先立ち、あらかじめ2冊の参考文献、すなわち、吉見俊哉、『親米と反米 戦後日本の政治的無意識』、および Richard F. Kuisel, *Seducing the French: The Dilemma of Americanization* が指定されました。この2冊の文献は、国境の内側の「アメリカ」ではなく、日仏における「アメリカ」の存在について論考がなされたもので、上記のとおり、アメリカが外部として各地でどのように捉えられ、またどのようにそれが論じられているかを考察するためのきっかけとして、事前に準備が求められました。その上で、当日の会は、それらをもとにした発表者による発表と参加者からのコメントをやり取りするという形で進められました。私の方では吉見氏の著書を中心に、参考文献についての発表をさせていただき、遠藤先生からは参考文献の内容を踏まえ、学術的考察の観点からの「反米論」というテーマの現状についてお話をいただきました。

今回の会で最も勉強させていただいたのは、アカデミックな「反米論」を通じて見えてくるものが何かという点でした。アメリカ人による、アメ



リカネスを中心線にしたナショナルな主体形成のダイナミズムではなく、他者としての主体として立ち現れるアメリカの姿がそこにはありました。つまりここで、「2つのアメリカ」が形作られて来るのです。一口に「反米」といっても、その定義は一義的ではなく、そのなかで具現化される事象としてはプライベートな嫌米意識によるものから、社会システムの観点からの重い米国批判まで広範に渡っているとのお話を伺いました。しかしながら、そうであっても、親/嫌で語られるアメリカ論をもとにした個々の事象について考えると、ではいったいアメリカのどのような要素について、それぞれの評価がそのとき付与されているのかという疑問が湧いてきます。今回取り上げた吉見・Kuisel両氏の論考を踏まえた上で、嫌米/親米という意識の中に、例えばアメリカに高度資本主義の体現や、近代社会のモデルを見ろというような視点がもしあるのであれば、「外部としてのアメリカ」という視点が、アメリカ自身による主体形成をまた違った方向から考察する、その手立てとなり得ると考えるのはもっとものような気がしますし、とても魅力的な論考だと考えています。

今回の会は、日本でのアメリカの存在について考える機会ともなりましたが、自分の知らない、生まれる前の日本の社会的なパースペクティブについても勉強することができました。この点も含めて、今回の会を大変有意義に過ごすことができました。

## 新所長と2008年度所員、特別研究員に聞く

次の3つの質問に教えてください。

1. 研究フィールドを教えてください。
2. アジア太平洋地域で関心のある国とその理由は？
3. 気分転換するときに欠かせないものは何ですか？

亀嶋庸一 所長

1. 現代政治思想です。現在の研究対象はマックス・ウェーバーです。ウェーバーの作品には中国やインドの宗教に関する社会学的研究もあるのでこのセンターの仕事とも関連があります。
2. 私はすべての国や地域に関心があります。
3. 映画、それと大学からこっそり抜け出すことかな？

経済学部 近藤 正先生

1. 始めは言語学だったのですが、82年から哲学に転向しました。哲学のなかでも記号学という分野です。国際俳句や国際連句は学生時代からのライフワークです。
2. アジアの統一を考えると中国とインドです。漢字文化圏の交流では台湾と韓国と中国です。連句では、それにインドネシア、マレーシアが加わります。太平洋の対岸に目を転じると、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど英語圏に俳句や連句仲間がいます。要するに全部俳句や連句で繋がっています。
3. ちょっとの時間ではお茶、もっと時間があればお酒、もっと時間があれば温泉、もっと時間があれば旅行ですね。昼はぼんやり風を観るのもいいし、夜はぼんやり月を観るのもいいですね。

文学部 石 剛先生

1. 東アジア。特に日本と中国。
2. 1と同じ。生まれの場所と生活している場所だから。
3. 温泉というところかな。

理工学部 里川 重夫先生

1. 環境汚染、地球温暖化対策となる科学技術の研究開発を行っています。具体的には汚染物質を分解したり、CO2発生量を削減できる材料(触媒といいます。)の合成や反応に関する研究を行っています。
2. 関心のある国は中国です。急速な経済発展が環境破壊と温暖化の促進をもたらしているため、さまざまな産業分野で環境対策技術の開発や導入が急務となっています。日本も中国から飛んでくる汚染物質の被害を被っています。
3. お酒です。友人や学生たちとお酒を飲みながら趣味や仕事や人生の話をするのがとても気分転換になります。



法学部 飯田 高先生

1. 法社会学、現在は特に「法のインパクトに関する実証研究とモデル構築」。
2. タイ。チェンマイ短期留学の引率がきっかけで、社会のしくみ、山岳民族の生活、人々の物事の捉え方などに興味を感じたから。それと、単に暑い場所が好きなので。
3. 睡眠。



## 特別研究員 相澤 真一さん

1. 教育社会学です。教育を受けることが人々の生活や社会全体にどのような影響を与えるのかを考察しています。

学部の時に歴史社会学に興味をもち、教育の分野で歴史資料を漁ることの楽しさを感じました。その後、戦後日本の教育拡大過程を中心対象とし、計量データや社会調査データも積極的に用いた研究を行うようになりました。共同研究プロジェクトでは、さらに東アジアや欧米の教育拡大との国際比較に拡げていきたいと思っています。

2. 学問的な関心では、豊かな社会でありながら、分厚い貧困層が存在するアメリカの動向が気になります。今回の海外出張でも社会の中の格差の大きさには様々な社会学的想像力が喚起させられました。

また、たぶん誰も答えられないような地域を挙げさせて頂くとロシアのシベリア地域に関心があります。シベリア上空を横断する飛行機に乗ると、フライトマップ中に周囲の都市名がまったく掲載されない地帯があります。まさに人が住む最果ての地なのだろうなと思うとそこにどう世界が広がっているのか、わくわくしてきます。

3. クラシック音楽です。聴くのも演奏するのも大好きなので、演奏会に行ったり、自分で楽器を吹いて気分転換をします。演奏する楽器はサクソフォンで、ジャズの楽器と思われがちですが、立派なクラシックの分野も存在します。ただ楽器の演奏は趣味が高じて、研究同様に根を詰め過ぎてしまうこともあります。そういう時は、研究や仕事に戻るか、スポーツ観戦をして息抜きします。

## 特別研究員 山上 亜紀さん

1. 文化人類学専攻で、対象地域はネパールです。

2. もちろんネパールですが、これは関心のある国、というよりも関心を持たなければならない国です。個人的に、今一番行きたい国はトルコです。なぜか昔から、ボスポラス海峡を渡るのが夢でした。

3. 弓と矢です。気分転換と言うよりも、弓を引く瞬間は無になれる気がします。



## 特別研究員 重野 純子さん

1. 日本と(旧東西)ドイツの婦人雑誌の分析を通して各国におけるメディアと女性の置かれた状況について研究。現在は明治・大正期の婦人雑誌を研究している。

2. 韓国。研究者仲間と頻りに交流しているから。キムチを6キロ買って帰ってきたことがある。重かったが、最後まで美味しく食べた。

3. 落語を聴いたり、落語についての本を読んだりすること。寄席にも出掛けるようにしている。古典、新作もどちらも好きで、現在は柳家喬太郎のCDをよく聴いている。

## アジア太平洋研究センター 客員研究員 募集!

12月8日(月)締め切り

CAPSでは、来年度海外招聘客員研究員を募集しています。詳細は募集要項をご覧ください。

## 便宜供与

滞在期間：Aコースは1～2ヶ月程度、Bコースは1～3ヶ月程度

宿舎：国際交流会館を無料提供(A、Bコース共通)

滞在費：Aコースのみ月額5,000円を限度として支給

交通費：Aコースのみエコノミー割引航空運賃支給

## 責務

研究会発表(A、Bコース共通)

ニュースレター原稿執筆(A、Bコース共通)

センター紀要に原稿投稿(Aコース)

## アジア太平洋研究センター叢書 新刊のご案内

## 『地域主義の制度論的研究』廣部和也編

2008年4月3日(木)センター叢書『地域主義の制度論的研究』廣部和也編が発行されました。



## 第 部 地域主義の展開

1. 「憲法」という語句の力に関して  
ヨーロッパの憲法の図像学  
ジョゼフ・ワイラー (Joseph H.H. Weiler)  
New York University School of Law (荒木教夫 訳)

2. 地域的国際組織における司法制度の構築  
イモラ・シュトレホ (Imola Strehö)  
European Court of Justice (荒木教夫 訳)
  3. 東アジアにおける多角主義的地域主義に向けて  
チョ・ソンジュン (Cho Sungjoon)  
Chicago-Kent College of Law (小沼史彦 訳)
  4. 国際法形成の観点から見た ASEAN  
東南アジア非核兵器地帯条約を中心に  
小沼史彦 成蹊大学法学部
- 第 部 国際社会の組織過程における地域主義
5. 国際連合と地域主義  
地域的国際組織との関係を中心に  
廣部和也 成蹊大学法科大学院
  6. WTOにおける地域主義  
荒木教夫 白鷗大学法学部
  7. 貿易協定の実施に有用な国際法メカニズムの構想  
キャレン・アルター (Karen Alter)  
Northwestern University Evanston, IL (荒木教夫 訳)

## アジア太平洋研究センター

## 研究プロジェクト募集!



CAPS では、来年度プロジェクトを募集します。  
詳しくはセンター(内線3549)までお問い合わせ下さい。

応募書類受付： 9月3日(水)～9月16日(火)

## 共同研究プロジェクト(研究費は上限600万円)

期 間 : 3年間

メンバー: 本学専任教員を少なくとも2名含むこと

責 務 : 終了後1年以内に叢書を出版

中間報告会並びに成果報告会にて発表

## パイロットプロジェクト(研究費は50万円)

期 間 : 1年間

メンバー: 個人研究

責 務 : 本センタージャーナルへ論文提出

成果報告会にて発表

## プロジェクト説明会

プロジェクト説明会を下記の日程で行います。是非ご参加ください。

7月22日(火) 12:15～13:00

7月25日(金) 12:15～13:00

場所: 両日とも10号館第2中会議室

## 本を読む

『司法への市民参加の可能性：日本の陪審制度・裁判員制度の実証的研究』  
藤田政博 著 有斐閣 2008年1月発行

法学部准教授 飯田 高

司法に一般市民を参加させる制度 来年5月から導入される「裁判員制度」はその主要例ということになる。が機能するための条件を実証的に探っていく。これが本書の目的である。裁判員制度をはじめとする司法制度改革に携わってきた著者の言葉を借用すれば、そのような実証研究は「約100年前からの『宿題』」である。1928年から1943年までの間に陪審制が実施されているという事実からも推測されるように、司法への市民参加の是非は明治時代から問われ続けた課題であった。

この課題は、「法律知識の乏しい一般市民に判断を任せてよいのか」という疑念と、「社会経験の乏しい裁判官に判断を任せてよいのか」という疑念とのほざまで、いろいろと形を変えつつ断続的に顔を覗かせてきた。しかし、このような問題に対して実証的に解答が試みられることは、少なくとも司法への市民参加という文脈ではほとんどなかったと言ってよい。どのような条件のもとでなら健全な判断が期待できるだろうか。どのような方法で意思を集約すれば適切な結論を導くことができるだろうか。それらの問いに答えるための理論や事例は、法学の領域の外で豊富に蓄積されている。相対的に社会経験のある一般市民、そして法律知識のある裁判官が一緒に加わる「集合的意思決定プロセス」をどう組み立てるかで、市民参加が司法に与える効果、ひいては社会にもたらす影響も大きく異なってくると考えられる。

本書は2つのパートに大別される。前半部では、戦前期日本における陪審制をめぐる議論、大正時代に成立した陪審制の実態を詳細に記述する。本書のメインになると思われる後半部では、特に社会心理学の理論と方法(主として実験による検証)を駆使し、たとえば「陪審制や参審制は日本人の国民性に合わない」といった使い古された言い訳を打破していきながら、あるべき集合的意思決定プロセスの検討を進めていく。一連の考察を経た後、市民が社会過程に「積極的」に参加する機縁として



裁判員制度が機能すれば、という願いが述べられ、その願いとともに本書は締めくくられる。

言うまでもなく、裁判員制度には数多の難点があるし、制度を戦略的に利用したり避けたりしようとするアクターが存在するのも事実であろう。ひょっとすると、市民にとっては単なる義務としか思えないような代物かもしれない。だが、裁判員制度に賛成するにしても反対するにしても、意見集約の方法、司法の判断の正当性、司法と市民との距離、さらには民主主義のあり方などをめぐる重要な議論が喚起されたという点において、副次的であるにせよ一定の利益はすでに得られているようにも見える(司法の信頼という面で、また privatization という面でも、以上の議論はいずれ避けられないものであったらう)。

あとはできあがった制度をどう活用するかである。評議の進行方法に関しては、法律でさほど詳細に規定されているわけではなく、まだあそびの部分は大きい。これからの活用次第で「積極的」な参加が実現するか否かは変わってこよう。本書で得られている知見は裁判員制度の今後の活用を考えるうえで役立つ...と書こうとしたが、近くて見えぬは嘘である。普段のゼミあるいは会議での議事進行や意思集約のしかたを改善するうえでも、本書で紹介されている実験の結果は参考になるかもしれない。



## 研究活動報告(4月1日～6月15日)他

4月3日(木)アジア太平洋研究センター叢書『地域主義の制度論的研究』廣部和也編を発行

4月4日(金)センタープロジェクト研究海外出張(4月15日帰国)

出張者: アジア太平洋研究センター特別研究員・山上亜紀

調査地: ネパール、ピラトナガル

目的: ネパール制憲議会選挙に伴う選挙監視

4月8日(火)安部パイロットプロジェクト研究海外出張(4月12日帰国)

出張者: 成蹊大学法学部教授・安部圭介

調査地: パンクーバー(カナダ)

目的: 資料収集および現地専門家との意見交換

4月12日(土)植林・バイオマスプロジェクト研究会開催 14:00-18:00

テーマ: プロジェクト概要説明、実施事項の確認

報告者: 成蹊大学理工学部教授・小島紀徳

場所: 12号館2108D教室

出席者: 18名

5月1日(木)デモクラシーとナショナリズムプロジェクト研究会開催 15:00 - 18:00

テーマ: アクティブ・シチズンシップ論をめぐって

報告者: 早稲田大学・平石 耕

場所: 10号館大会議室

出席者: 20名

5月15日(木)学術研究員募集の説明会  
16:30 - 17:30

場所: 1号館3階センター会議室

出席者: 11名

5月28日(水)社会的不平等の調査研究プロジェクト 海外出張(6月2日帰国)

出張者: 東京工業大学大学院・関口卓也

調査地: レドンド・ビーチ(米国)

目的: 日米数理社会学合同会議への参加およびプロジェクト研究の発表

5月29日(木)社会的不平等の調査研究プロジェクト 海外出張(6月3日帰国)

出張者: アジア太平洋研究センター特別研究員・相澤真一

調査地: レドンド・ビーチ(米国)

目的: 日米数理社会学合同会議への参加およびプロジェクト研究の発表

5月29日(木)社会的不平等の調査研究プロジェクト 海外出張(6月4日帰国)

出張者: 成蹊大学文学部専任講師・小林 盾

調査地: レドンド・ビーチ(米国)

目的: 日米数理社会学合同会議にオーガナイザーとして参加。プロジェクト研究報告。

6月3日(火)アジア太平洋研究センター共催講演会開催 16:30 - 18:00

演題: チベット問題をめぐって

講師: 一橋大学客員教授・孫 歌(中国社会科学院文学研究所 比較文学研究室研究員)

場所: 5号館101教室

参加者: 173名

## \* 事務職員の異動

6月1日付けで、後藤哲史が室井直子の後任としてセンター事務室に配属になりました。

## CAPS Newsletter No.99

2008年7月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>